



兵法書 ② (司馬穰苴の兵法)

2月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年2月11日(土)

「司馬」とは、軍政を司る官職で、堯、舜の時代には既に置かれていたという。

今に伝わる司馬法と言う兵法書は、戦国時代に齊の国で整理されたという。齊が景公の時代(BC547～BC490 在位)、晋・燕の侵略を受け危機に陥った時、将軍に抜擢されて見事に撃退に成功したのが司馬穰苴である。

後に齊の威王(BC356～BC320 在位)が、その戦法を用い諸侯に君臨した時、古くから伝わる司馬の兵法に穰苴の兵法を加え、「司馬穰苴の兵法」と名付けたと言われる。

古来の兵法は、「敗走する敵は深追いしない、敵が陣列を整えるまでは攻撃を控える」等を戦いの作法(礼)としていた。それは既に春秋戦国には時代遅れであった。

司馬穰苴は旧来の戦争観を再考し、一旦何の為に戦うのか、戦いをもって戦いをなくすことを目的とすべきだという。

「戦いをもって戦いを止めれば、戦うといえども可」と言う。

現代風に言えば抑止力としての軍事は容認される。

また、「国大なりといえども、戦いを好めば必ず亡ぶ。天下安しといえども、戦いを忘れれば必ず危し」。と戦いはみだりに行うべきではないが、それを忘れると国を危くするという。

そのために、普段から「礼」、「仁」、「信」、「義」、「勇」、「智」を教え込み、戦いに際してもこれに則る。

また、「政治でも軍事でも、組織に対する締め付けは厳しすぎてもいけないし、緩めすぎることはいけない」、「戦うときは、天の時、戦費、準備、この三つを検討すること」、「軍にあつては常に将兵の心を一つにし、賞罰のけじめを厳しくすること」、「大部隊、小部隊に応じその利点を上手く生かして戦うこと」、「敵を対陣した時は、様々な手段により敵の虚実を探り、追撃する時は伏兵に備え、常に退路を確保すること」を忘れてはならないという。

参考：(司馬遷史記、司馬穰苴列伝、徳間書店)